

どこからが滑稽俳句ですか 山頭火の場合（三）

有富洋二

山頭火翁、あなたは、天性は明るい人ではないですか。温暖な瀬戸内に生まれ、向日性を秘めた人ではないですか。先祖は、一か所に留まる農耕民ではなく、瀬戸内の海運を業にしていたのでは、という説に賛同します。窮境から抜け出すために、漂泊放浪の旅へ出る、というところにその可能性を強く思います。

各地での「層雲」句友との圧倒的な交友の多さ、深さに、解放的でほがらかな人柄を想像します。立ち姿も立派で、笑い方も屈託のない大声で快活であったようです。其々の結庵も、その地の句友たちの尽力によっていますね。人に会いたがり、語り尽くし、人の財布で酌み明かします。生粋に内向的な人であったら、ここまで他人は関わってこなかったと思います。揚げ句、「やっぱり一人が良い」などとぼやき続けます。そうして生まれる俳句にはまたも滑稽が滲んでみえます。

はじめてあうてはだか

やっぱり一人がよろしい雑草

山の中鉄鉢たゝいて見たりして

「俳諧は三尺の童にさせよ」。山頭火自身は、井月や放哉に、思い入れがありましたが、山頭火ほど、この芭蕉のことばに、忠実な俳人はいないのではないのでしょうか。対象は相も変わらず、山、水、雑草、 とんぼ。そして、食べる、飲む、休む、です。対象に密着し、感じたままに、素養は十分にありながらも易しい言葉で俳句にします。

大正十四年、四十二歳で得度し、法名「耕畝」となります。曹洞宗最下位の僧籍、所属僧堂のない野放し、とはいえ禅僧ですから、来し方行く末を思索しながらの行乞、それでも口遊さむシンプルな一句には、読む人の主観に滑稽さと呼び起こしてくれます。

ゆふ空から柚子の一つをもらふ

春の山からころころ石ころ

さくらさくらさくさくらちるさくら

山頭火俳句のレトリックには、取り合わせ、オノマトペ、対句表現、リフレイ
ン、擬人化、メタファーがみられます。中でも目を引くのは、山頭火独自のリズム
です。ただ歩き続ける。右足を出して、左足を出す。そして右足を出す、そし
て…。この歩くリズムが、俳句のリズムとなり、歩くこと、作ることが一体の流
浪人になってゆきます。

すべつてころんで山がひつそり

はれたりふつたり青田になつた

ふまれてたんぼぼひらいてたんぼぼ

私は自由律俳句を作ったことはありませんが、たまたま山頭火の住んだ所の
近くに住みました。生家や営んだ酒造場、「其中庵」、「一草庵」、そして今、「風
来居」のあった温泉町に住んでいます。不思議な縁です。山頭火の哀しみに沈み
込むよりも、凡人の私などが、その俳句を読んで笑っていても、山頭火も「それ
でいいのさ」とほほ笑んでくれている姿が浮かんできます。そして次のような声
も。

「俳句は気合、禅坊主の喝のようなものだ。さらに飲むぞ。詠むぞ。あゝユカ
イユカイ」

(了)